

絲綢之路

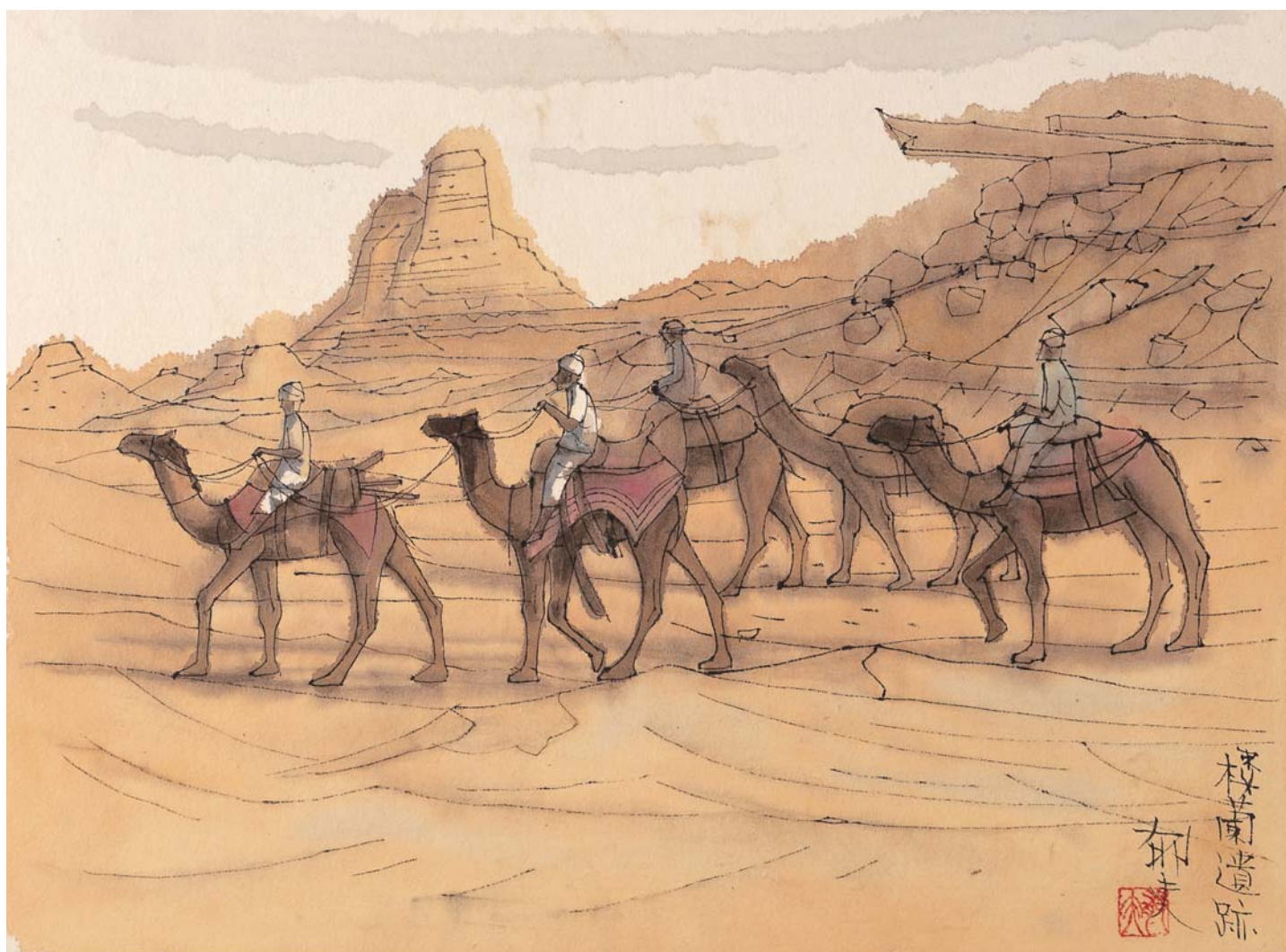
シルクロード

S I L K R O A D

2014-秋

No.76

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



桜蘭遺跡 2007年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

クスコ市街

(ペルー共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

ペルー南部、首都リマの南東約五百七十キロの古都。アンデス山脈の標高三五〇〇メートルに位置し、インカ帝国の首都として十五世紀に繁栄の絶頂にあったクスコは、一五三三年、フランシスコ・ピサロ等のスペイン人によって征服された。しかし、クスコの機能的な都市計画と格子状の街路に驚嘆した征服者たちは、スペインとキリスト教の支配を誇示する街として、この街を完全には破壊しなかった。そのため、ここではインカの要素とスペイン的要素との文化混淆を随所で見ることができる。(一九八三年に文化遺産として登録)

公益社団法人

日本ユネスコ協会連盟

巻頭言

再興院展

「白寿」の年に想う



日本美術院
理事長
松尾敏男
(まこととしお)

平山郁夫先生が喜寿を迎えられた時、先生との関係が深い方たちによって祝いの記念誌がつくられた。先生のお人柄、御業績を象徴する*「平和の旅人」という標題の本で、私も「バーミアンへの旅」という題名で拙文を寄稿させていただいた。

作家の竹西寛子先生も寄稿されていた。先生の題名は「平明について」とある。もちろん、内容は竹西先生流の「平山郁夫論」であった。

私にとって、その冒頭部分の文章が今も強く頭に残っている。少し長くなるが引用させていただく。
——院展が知らせる日本の秋がある。

よほどのことのない限り、私はなるべく早く院展に行くのを近年のな

らわしにしている。上野公園に馴染んだのか馴染まれたのか、とにかく日本人として誇らしく思う国立博物館が建つひとつづきの空間に東京都の美術館があつて、そこが院展の会場なのだ。秋が来る度に納得する。納得したい。——

私は竹西先生のこの文に接すると、長年、日本美術院に籍を置いた者として、郷愁にも近い感慨を覚える。

画家として、作品を発表する際は一切の手抜きは許されない。創作作業は肉体的にも精神的にも孤独で厳しい。殊に秋の院展への出品作となると、普段の比ではない。同人だけでなく、出品者のひとり、ひとりが一年間の努力、研究の成果が試されるのだ。

許されて、私が日本美術院の同人となつて四十三年の歳月が過ぎた。創作活動は苦しみの連続であるが、出来上がった作品は自分史のページ、一ページであると思うと、これには大いなる喜びであり、画家冥利に尽きる。

私の画業の師は豎山南風先生(一八八七―一九八〇)である。豎山先生の師は横山大観先生(一八六八―一九五八)で、おふたりとも長きにわたり、日本美術院の屋台骨を支えてこられた。そして、豎山先生は九十三歳、大観先生は八十九歳の天寿を全うされた。私も本年春に米寿を迎えたが、ふたりの偉大な師と比べれば、まだまだ青二才……と思つている。そのぶん気だけは若いと思つている。

日本美術院の綱領は三つの項目から成っている。その三番目にこう記されている。

日本美術院は藝術の自由研究を主とす 教師なし先輩あり 教習なし 研究あり

日暮れて猶道遠し。芸術の道を志す者にとって、人生これで良し、ということはない。求められているものは不断の努力と研究の成果である作品なのだ。私はこの心をもって、ゴールのないゴールにむかつて走り続ける所存である。

日本美術院は大先覚者天心岡倉覚

三先生(一八六二―一九一三)が、明治三十一年(一八九八)の春、東京藝術大学の前身である東京美術学校の校長を退任した直後に同校を去つた橋本雅邦先生(一八三五―一九〇八)をはじめとする同志の先生方と相諮つて創立した研究団体で、東洋美術の正しい伝統を基礎として維持し、新時代の新美術を開発、樹立すべきことを指標としたものであった。

日本美術院は先駆者の宿命ともいうべき幾多の紆余曲折を経たが、時に存亡の危機にも曝された。そのピークは大正二年(一九一三)の天心先生の死であった。

亡き天心先生の「こころ」を「こころ」とし、その遺志を継ぎ、大正三年に日本美術院の再興を企て、さらに同年に再興第一回展覧会を開いたのは横山大観先生を中心に下村観山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅等の先生方の努力の賜物であった。

深夜、アトリエで思索にふける時、私の脳裏に浮かびあがつてくるのは、今日の日本美術院を築きあげた諸先輩の先生方の御姿である。明年は院展も百回目を迎える。こうした年に居合わせることが出来るのは大変幸福なことと思う。健康に留意し、この記念すべき年にむかつて感謝の意をもって作品に取り組む覚悟である。



※2007年刊行。非売品。

特別展「みちのくの仏像」によせて

—千年前の東日本大震災を体験した仏さま

八六九年、東北地方を襲った貞観地震の規模は、二〇一一年の東日本大震災に匹敵するといわれる。二つの巨大地震を知る「みちのくの仏像」が語りかけてくるものは……。



魅惑の「みちのくの仏像」のお出まし

東京国立博物館では二〇一五年一月一日から四月五日まで、本館特別5室にて東北六県のそれぞれを代表する仏像を集めて特別展「みちのくの仏像」を開催します。東北には魅力的な仏像が多く残っていますが、それをテーマにした展覧会を東京国立博物館で開催するのはこれが初めてです。

展覧会で最も注目していたいただきたいのは、東北の三大薬師と称される岩手の黒石寺、宮城の双林寺、福島の新常寺の薬師如来像がはじめて一堂に会することです。いずれも九世紀に造られた一木造（像の



重文 薬師如来坐像（岩手・黒石寺蔵）平安時代・貞観4年（862）

本体を一つの木から彫り出した彫像）の堂々とした表現で、いま残る東北で造られた仏像のなかで最初期のものです。日本に仏教が伝わったのは六世紀半ばのことですが、一世紀半後の奈良時代には、仏教とその美術は隆盛を極め、それが全国に広がりました。七四一年に聖武天皇より出された国分寺建立の詔は、各国の中心となる寺院の整備を目的としたもので、東北でも仙台市に陸奥国の国分寺が創建されました。双林寺はその文化圏にあります。勝常寺がある会津は、八世紀末には徳一という僧が活動しました。徳一は、天台宗を開いた最澄（七六七―八二二）と論争を繰り返した僧で、会津は仏教思想上の重要な拠点となったのです。勝常寺の薬師如来像の細くうねるような目の形は奈良時代の仏像の表現ですが、それが取り入れられたのはそのような会津の歴史と関わるはず。

一方、岩手県など東北北部に仏教が伝わったのは、坂上田村麻呂（七五八―八一）によって胆沢城が建設された八〇二年以降と考えられます。それまで都と争っていたこの地の人々が、都の文化である仏像をどのように思い、受け入れたのかはわかりませんが、六〇年後に造られたのが黒石寺の薬師如来坐像です。像は一木造ですが内部が刳られていて、そこに貞観四年（八六二）の年記と造像に関わった人々

ります。その情景は大変に神秘的です。像の頭頂の大きなコブには顔が表されています。頭頂にあるので仏像というべきでしょうが、愛らしいおかつ頭の雪ん子のようにみえます。

岩手の成島毘沙門堂の吉祥天と伝えられる像は、九世紀に造られたと考えられます。整った顔つきには近づきがたさすらある、美しい都ぶりの像ですが、こちらも東北らしい像といえます。というのは、像は東北の仏像にしばしば用いられたケヤキで造られていて、魅力の一つである木目の美しさは、ケヤキでしか表せない自然の美しさだからです。

展覧会にはほかにも、鎌倉時代に造られた写実的で躍動感にあふれる山形・本山慈恩寺の十二神将立像や、生涯に十二万体の像を造ったという円空（一六三二―一六九五）の初期の作品である、青森・常楽寺の釈迦如来立像、西福寺の地藏菩薩立像、秋田・龍泉寺の十一面観音菩薩立像などが



国宝 薬師如来坐像および両脇侍立像（福島・勝常寺蔵）平安時代・9世紀

出品されます。特別展「みちのくの仏像」は、東北の仏像の魅力と多様性を知っていただく良い機会になるはず。



復興への思いをこめて

一つの展覧会には関係者のさまざまな思いがこもっていますが、この展覧会には二〇一一年三月十一日に東北地方をおそった巨大地震の記憶と、少しでも被災地の役に立ちたいという願いがあります。

発生からしばらくの間は、東京にいた私たちですら、いい知れぬ不安を感じました。そのような地震直後の厳しい状況の中、被災地の方々がみせた忍耐強さや助け合いの精神は、日本はもとより世界中の人々が心を動かされ、賞賛しました。私は被災地の人たちのその姿を見て、東北の仏像の力強く、それでいて優しい顔には、そのような気質が表れているように思えてなりません。その人たちの先祖だからこそ造ることができた東北の仏像の魅力をぜひ多くの人に見てほしいと思い、この展覧会を企画しました。

さて、二〇一一年の地震とそれが引き起こした津波は、多くの文化財に被害をもたらしました。今回出品される双林寺の薬師如来坐像は、深刻な被害ではありませんが修理が必要でした。黒石寺では、同



聖観音菩薩立像の頭頂部（秋田・小沼神社蔵平安時代10世紀）



重文 十一面観音菩薩立像（宮城・給分浜観音堂蔵鎌倉時代・十四世紀）画像提供…東北歴史博物館

の名前が記されています。肩が張って厳つい体、鋭い眼差しは、平安時代前期の様式ではありますが、この地の人々の思いがあらわれているかもしれない。厳しさの中に、人々を見守るあたたかさが伝わってくる像です。



東北地方の人々の心を支えた仏像

秋田の小沼神社の聖観音菩薩立像は、三大薬師よりも少し遅れて十世紀に造られたと考えられますが、この展覧会の中で最も東北らしい仏像のように思えます。小沼神社は山の中にありますが、坂道を登っていくと突然視界が開け、そこに小さな沼と堂があ



重文 薬師如来坐像（宮城・双林寺蔵）平安時代・9世紀
画像提供：東北歴史博物館

じ収蔵庫に安置される重要文化財の僧形像が損傷しました。

東北地方は地震に繰り返し襲われてきました。八六九年に起きた貞観地震は、規模が二〇一一年の地震に近いことから注目されるようになりましたが、黒石寺の薬師如来坐像はその七年前に造られていたので、二つの巨大地震を知る像です。御住職様は多くの人に、二度の地震を経験した御仏像に接してほしいという思いから出品を決断されました。

最後にもう一体紹介したい像があります。宮城・給分浜観音堂の十一面観音菩薩立像です。この像が安置される観音堂は、牡蠣の養殖で知られる牡鹿半島の給分浜の高台にあります。およそ二九〇センチメートルあるこの像は、沖に出た人も含め、地域の人々を常に見守っているようです。観音堂から見える海岸の地区や養殖場は東日本大震災の津波で甚大な被害を受けましたが、高台にまつられる本像は難を逃れました。地域の人たちは津波の害の及ばないところに安置し大切に守ってきたのです。

会期中には地震から四年を迎えますが、仏像をとおして東北の魅力を知っていただき、地震に襲われた東北のことを改めて思い起こしていただきたいと思っています。この展覧会の収益の一部は、被災した文化財の修復に役立てていただきます。



東京国立博物館
平常展調整室長
丸山士郎
（まるやま しろう）

「シルクロード」世界遺産へ

国境を越えて伸びる壮大な夢

シルクロードが世界遺産へとなっていく。
平山郁夫画伯が描いていた夢が、ついに実現。
登録を機に改めて画伯の想いにふれる。

世界遺産となったシルクロード

本年六月、カタールの首都ドーハで開催された第三十八回ユネスコ世界遺産委員会は、中国・カザフスタン・キリギス三カ国が共同申請した「シルクロード」を世界文化遺産として登録した。英語の名称は、「Silk Roads : the Routes Network of Tianshan Corridor」となっている。

中国と西欧（ローマ）を結んだいわゆるシルクロードのうち、長安（現在の西安）・洛陽から「天山回廊」を経て中央アジアにいたる部分で、三十三件の構成資産から成っている。内訳は、中国に二十二件、カザフスタンに八件、キリギス共和国に三件となっている。ローマにいたるシルクロードは、勿論、これで尽きるものではなく、三カ国の申請書類には、本件世界遺産のタイトルとして「Initial section of the Silk Roads」の表現が用いられていた（シルクロードの最初の区間、天山回廊の交通路）。

ユネスコが作成した概要によれば、このシルクロードは、長安・洛陽から中央アジアのジェティス地区まで、全長五〇〇〇キロにわたり、紀元前二世紀から一世紀にかけて形づくられ十六世紀まで活用さ



玉門関遺跡。中国甘粛省敦煌市北西90キロほどの地にある。南西にある陽関と共にシルクロードに沿う東西交通の要地。名称の由来は中央アジア特産の「玉」がこの関を通過して漢土に運ばれたことによる。現在の遺跡は唐代のものである。

先生二十九歳の時の傑作であるが、先生ご自身が、「以来、玄奘の旅を追体験するためシルクロードの旅を続けてきた」と述べておられる。ユーラシア大陸を貫くシルクロードの各地に先生は百五十回ほど赴いて、そこで出会った人々、風景、そして遺跡などを絵筆で写し取られた。また、中国の敦煌、カンボジアのアンコール遺跡、アフガニスタンのバミヤン遺跡、北朝鮮の高句麗壁画古墳などの保存と修復に私財を投入しながら、多大の貢献をされた。

さらに特筆すべきこととして、ユネスコの平山郁夫シルクロード奨学金事業がある。平山先生は芸術大学の若き研究生の頃、ユネスコの奨学金を授与され、西洋で絵画の研究をされた。この恩に報いる想いもあり、平山先生は、ユネスコに対し、世界のシルクロードに関する若手研究者を支援するための奨学金を提供された。毎年、世界から十名の研究者が選抜されて、実に多様なテーマについて研究が展開された。十年間で計一〇〇名の研究者がその恩恵に

れた。多様な文化や文明を繋ぎ、物品、宗教、科学的知識や技術革新、文化的慣習、言語、芸術など文物の計り知れない交流をうながした。交易の対象となつてのは、高価な物であり、特に中国の絹はほとんど通貨として扱われた。絹のほか、中国からは、磁器、漆器、茶などが、また、中央アジアからは、馬、香辛料、宝石、彩色ガラスなどが中国にもたらされた。無花果、石榴、葡萄といった果実なども中国に伝えられた。また、芸術分野に関わる楽器や絵画などは相互に交流した。こうした人や物の交易に加え、都市計画や建築の知識、文学、芸術、技術などが行き交い、なかでも、仏教、ゾロアスター教、ネストリ



敦煌莫高窟遺跡を取材中の平山画伯（1999年）

浴した。私は、たまたまパリのユネスコ本部の奨学金部長をしていたため、平山シルクロード奨学金事業の実施に携わる幸運にも恵まれた。

新たな夢の実現に向けて

ユネスコ北京事務所長として赴任した後、平山先生のご提案を受け、シルクロードの起点、中国の西安で「ユネスコ・シルクロード国際シンポジウム」を開催することになった。主催は、ユネスコ本部とユネスコ親善大使の平山郁夫先生。参加者は、平山奨学金を授与された者のうち、特に優れた研究業績を挙げて選抜された五十名。これに世界の著名な研究者も加わった。会議は、二〇〇二年十一月十七日から二十日にわって開催された。奇しくもこの年は、「国連文化遺産年」に当たり、また、ユネスコ世界遺産条約採択三十周年にも当たるといふ記念すべき年でもあった。この会議で西安宣言が採択された。と同時に、中国側から予期せざる提案がなされた。それは、ユーラシア大陸の多くの国々を貫くシルクロード全体をユネスコの世界遺産に登録することを検討してほしいと要請するものであった。当時は、夢物語のように感じたものであったが、これが実現すれば、単に文化遺産の保存にとどまらず、それこそ諸国民の間の相互理解と国際平和に



2002年、西安における「ユネスコ・シルクロード国際シンポジウム」の模様。



左よりアフマド・ジャラリ氏。平山郁夫画伯。筆者。2002年、中国・西安にて。

ウス派キリスト教、イスラム教など世界の主要な宗教もこの道を介して伝播した。

中国内の構成資産には、竜門石窟、莫高窟（敦煌）など既に個別に世界遺産に登録されている物件も含まれている。また、玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典を取まとされる西安にある大慈恩寺の大雁塔や玉門関、高昌故城なども含まれている。

シルクロードと平山画伯の想い

私事にわたって恐縮だが、私自身がユネスコ北京事務所長の時代に、日中両国の専門家の方々のご指導を得て修復事業に携わった唐代の大明宮（修復したのは、含元殿の基壇）が含まれているが、この修復事業については、日本政府が拠出したユネスコへの信託基金を活用させていただき、事業選定当初から平山先生のご指導を仰いできた経緯がある。

さて、シルクロードの世界文化遺産登録については、平山郁夫先生の情熱とご貢献を抜きに語ることには出来ない。周知のとおり、平山先生の芸術家としての人生の大半はシルクロードに捧げられたと言っても過言ではなからう。平山先生のいわゆる出世作、「仏教伝来」は、玄奘三蔵をモデルにしたものである。

大きく貢献するものとして参加者全員の支持を得ることとなった。この提案は、西安宣言と一緒にコフィ・アナン国連事務総長と松浦晃一郎ユネスコ事務局長に提出されることになった。その送り状には、平山郁夫ユネスコ親善大使とユネスコを代表して出席したユネスコ総会議長であったイランのアフマド・ジャラリ氏が署名された。

一部とは言えシルクロードが世界遺産に登録され、二〇〇二年の西安宣言とそこに託された夢が一〇年余を経て実現することになった。亡くなられた平山先生が今ご存命でいらしたら、どのような感慨を抱かれたことかと思いを馳せつつ、改めて先生のシルクロードにかけられた情熱と世界的なご貢献を偲んでいる。

なお、絹と言えば、わが国の群馬県にある「富岡製糸場と絹産業遺産群」も同時に世界文化遺産として登録されたことも喜ばしいことである。



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟
理事長
野口 昇
(のぐちのぶ)

祇園祭

二五〇年ぶりに復活した大船鉾と 四十九年ぶりに本来の姿に戻った山鉾行事



京都の夏を飾る祇園祭。独特の囃子リズムの音にのって
都大路を行く華麗かつ壮大な山鉾巡行。
この伝統行事を守り、後世に伝えるための人々の努力をみる。



伝統と現実にはさまれて…

平成二十一年（二〇〇九）にユネスコの世界無形文化遺産にも登録され、今や世界にその名声を轟かせる祇園祭の山鉾行事には、八坂神社（祇園社）の三基の神輿渡御に伴う「風流」という大原則があった。昭和四十一年（一九六六）のことである。京都市は高度経済成長に伴って国際文化観光都市のシンボルロードとして御池通を拡幅していた。

七月十七日、私たちが前祭と呼ぶならわしにしている神幸祭に伴う二十三基の山鉾風流に後続させて、私たちが後祭と名付けている神泉苑での疫病退散を祈願する還幸祭の先ぶれとなる九基の山鉾が続いた。本来ならば、こちらは七月二十四日の行事である。前祭が後祭を吸収合併した、所謂合同巡行だったのである。

この豪華な山鉾巡行は市民は言うに及ばず全国からの観光客を喜ばせ、有料観覧席の収入で巡行補助金の支給を実現させ、懸装工芸品の修理や新調事業を可能とする条件を獲得したのである。これは当時としてはおおいに整合性はあるのであるが、神輿渡御に伴う神事の先ぶれとして重要な条件を失ってし



公益財団法人
祇園祭山鉾連合会
理事長
吉田孝次郎
(よしだ こうじろう)

まったのであった。

四条烏丸を九時に出発した風流しんりゅうの殿である曳山ひきやまが町内に帰り着くまで、四時間半の時を要する事ともなり、これを終わるまで見物する事は観客の辛抱を超えてしまっていたし、従来の十六日の宵山よしみと後祭二十三日の宵山が十六日一日だけとなり、歩行者天国に満ち溢れる観衆の数も京都の都市機能をはるかに超えてゲリラ豪雨など突発的な事態と重なれば、事故故につながりかねない！

合同巡行に踏み切った当時の謹厳な神道学者で、皇學館大学の学長を勤められた八坂神社の高原美忠宮司様（一九九二～一九八九）は神輿渡御あつてこそその山鉾巡行のあるべき姿を無に等しくする合同巡行など、お認めになるはずもなかったにも関わらず、山鉾の保守管理などに関する現実諸問題等に理解を示され、この合同巡行を「仮の姿」として受け入れる事やむなしと苦渋の決断をなされたのである。

復興！ 大船鉾

世界の無形文化遺産として、山鉾行事が認知された事は真に嬉しい事であるが仮の姿のままではいかんかという後ろめたさは私の体中に充満してもいた。

そんなときに前任者から山鉾連合会の束ね役を私は引き継いだ。

それは、四年前のことであった。幕末の元治元年（一八六四）に鉾本体を失っていた後祭の殿を務めていた大船鉾おおふねぼしが一五〇年後の本年に復興し、巡行に参加する事を公益財団法人としてその意思を公表したことも引き金となった。

これを機に、山鉾風流の巡行を六〇〇年間の伝統を踏まえて本来の姿に戻す議論を始めようと呼びかけたのである。

大船鉾は神功皇后の遠征譚にちなむ鉾で前祭の船鉾が出陣の船であるのに対し凱旋の船鉾とも言われている。神功皇后のご神面や懸装染織品が現存していたことも幸し、文化九年（一八一三）から十一年に記載された「増補祇園会細記」にある記録をもとに復興事業は進められた。



山鉾巡行を先導する筆者。

これに「山鉾風流」が氏子町より加わったのは室町時代の最初期、祇園社の庇護のもとに特定商品の販売権を保障されていた「座付の商人達」の都市市民としての教養がもたれていた「能楽」や「茶道」「華道」などの創始時期とほぼ時を同じくしている。

この山鉾風流は「錦繡きんこうの美しさ」で神の目を楽しませ、清らかで親しみやすい、「祇園囃子」を神の耳に届け荒ぶる神に鎮まってくとすのだ。これを見る民衆も神と共にこれを喜び「神人和楽しんじんわらく」の世界を創出する事にあるのであった。

山鉾の巡行が四十九年ぶりに本来の姿に戻すこと

京の誇り、日本の誇り、 祇園祭を次世代へ

貞観十一年（八六九）に創始された「祇園御霊会」ぎおんごりやうえ。これは都市災害ともいふべき疫病退散を願う神事で、その中心はあくまで神輿渡御である。それは、祇園社から人々の暮らす街区におでましになり数日間とどまられたあと神泉苑を経て本社にお帰りになるこの祭形態は祇園御霊会創始以来変わらなかったのである。

これに「山鉾風流」が氏子町より加わったのは室町時代の最初期、祇園社の庇護のもとに特定商品の販売権を保障されていた「座付の商人達」の都市市民としての教養がもたれていた「能楽」や「茶道」「華道」などの創始時期とほぼ時を同じくしている。

この山鉾風流は「錦繡きんこうの美しさ」で神の目を楽しませ、清らかで親しみやすい、「祇園囃子」を神の耳に届け荒ぶる神に鎮まってくとすのだ。これを見る民衆も神と共にこれを喜び「神人和楽しんじんわらく」の世界を創出する事にあるのであった。

山鉾の巡行が四十九年ぶりに本来の姿に戻すこと



復興成大船鉾の勇姿。

筆者略歴

一九三七年、祇園会、北観音山の町に生まれる。六三年、武蔵野美術大学助手。七三年、帰京。生家の京町屋を復元、改修し、生活工芸館、無名舎を主宰。二〇一一年より現職。

「和と洋の想を聴く」の公演を終えて

東の日本で育った音楽と西の欧州で進展した音楽が、出会い、融合した時、そこにまた新たな芸術が創生される。そのドラマを紹介する。



東京藝術大学音楽学部
附属音楽高等学校教諭
作曲家
高橋 裕
(たかはし ゆたか)

オーケストラ・アンサンブル金沢との出会い

二〇一四年三月二十六日「和と洋の想を聴く」和楽とオーケストラ・アンサンブル金沢との個展を文京シビック大ホールで行った。この世に生を受けて六十年、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校に勤めて三十年余り、私の作曲人生の総決算を期するものであった。

現代音楽がますます前衛化し、先が見えなくなっていた時代、二十代から三十代にかけて、一九七四年にはインドネシアでのワヤン・クリ(ジャワ島やバリ島に伝わる人形を用いた伝統的な影絵芝居)、ガムラン(大、中、小の様々な銅鑼や鍵盤打楽器による合奏の民族音楽の総称)の旅。一九八〇年にはインド・ネパール仏跡巡拝、一九八三年には中国のシルクロード、そして一九八六年には韓国仏跡巡拝の旅と、アジアのシルクロードを辿る旅を続けていた。また、毎日のように藝大の音楽資料室で世界中の民族音楽のレコードをカセットテープにダビングをし、また副科で能の「謡」と「仕舞」を習い始めたのもこの頃のことであった。

そして一九九〇年岩城宏之氏(一九三二―二〇〇六)

宇宙が奏でられていった。

「和」と「洋」の想が見事に融合した瞬間

最後の曲は「能とオーケストラのための『葵上』」(二〇〇六)、実際の演能とともにオーケストラが奏する演奏至難の曲である。

今回、個展を自ら指揮する上で愕然としたことがあった。演奏の三曲とも曲の出だしの速度表示が、同じ「〃」と非常に遅い同じテンポであることに気づいたのである。

作曲年代が二〇年の開きがあったにも関わらずである。しかし直ぐにそれも得心することは出来た。

それは大学時代から宝生流能楽師寺井良雄氏(一九四一―二〇一〇)に教えを受け、二〇年ほど稽古を続



「能とオーケストラのため『葵上』」の舞台



けていた能の謡と仕舞の拍感と呼吸感であり、摺り足の運びの間でもあった。私にとっては身体に染み着いたテンポの間と空間であったのである。

観世喜正氏と能楽師、囃子の神遊の方々とのリハールは、能の申し合わせと同じく公演前日の一度のみ。前日リハールは能を見ながらの手探り状態のままに、オーケストラの指揮は崩壊に近い様を呈していた。ゲネプロでは、ホールに作られた能舞台で演じられる能に魅せられながらも、いくつもの決め所の間合いをまだ掴み切れてはいなかった。本番を前にして、崖っぷちを歩む心地を味わった。

幕内の鏡の間から聴こえるお調べに始まり、能「葵上」の深奥に染み入るかのようにオーケストラは奏し始める。「源氏物語」を飾る代表的な場面の一つである、六条御息所の生霊が葵上の枕に立ちより打たんとする前半、鬼女となりて行者と相争う後半、オーケストラは重層的に絡み合いながらも圧倒的な演能に、挑みかかるような迫真の演奏がなされ、遂には折り伏せられて慈悲の姿となる御息所に、オーケストラは業の哀しみが消えゆくように四〇分に及ぶ曲を終えた。

私の至らぬ指揮にも関わらずソリスト、オーケストラ・アンサンブル金沢、能楽師の方々の渾身の演奏、演能により、オーケストラピットからステージに上がるまでの間、感謝の思いで涙を堪えることが出来なかった。

これこそ国内だけでなく海外にて行うべき公演だという意見を多くの方々からいただき、話が進み始めている。このような公演が実現出来たのも公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成、他財団の共催、助成、協力の賜物であった。

私の心の旅も、まだまだ歩み続けていくのであろう。

筆者略歴

一九五三年、京都市生まれ。東京藝術大学大学院作曲専攻修了。一九九一年、第一回芥川作曲賞受賞。オペラ「双子の星」、「般若涅槃交響曲」等の代表作がある。

家に作品を委嘱することを大きな柱とされた。またその中でも伝統文化豊かな金沢の地が母体であることを生かすために、邦楽とオーケストラのコラボレーションの曲も重視されたのであった。

邦楽器とオーケストラのアンサンブルをめざして

私たち「時の会」の四人に、邦楽器とオーケストラ・アンサンブル金沢との曲を書いてみないかと岩城氏から委嘱されたのは、作品展の公演後比較的早い時期のことであった。

コンサート「和と洋の想を聴く」は、オーケストラ・アンサンブル金沢から最初に委嘱された「笙とオーケストラのための『風籟』」(一九九二)から始まった。曲は、笙の一本の旋律が重なり合って合竹(和音楽法)となり、その技法はオーケストラまでに影響を及ぼし、やがて森羅万象の鳴動にまで到る一元的な宇宙を形作っていく。石川高氏の笙の光が差してくるような演奏と、大きな揺がりをもつオーケストラとの高まりに、息を呑む瞬間が現れた。この曲は国内ばかりではなく中米グアテマラのグアテマラシティーやアメリカのシカゴにても演奏され、十数回の再演の機会を得た曲となっている。

二曲目の「琵琶とヴィオラ、オーケストラのための『二天の風』」(二〇一三)は今回の演奏会のために書かれた最新作であった。

笙と同じく奈良時代に伝わった琵琶は、西アジア、アラビア圏などで古典音楽に用いる撥弦楽器であるウードを起源としている。またヴィオラは同じアラビア圏のルバーブ(リュート型の撥弦楽器)等を起源とされている。しかしながら、この二つの楽器はもともと撥弦と擦弦の違いがあるが、洋の東西に分かれて歴史を経ることによって、存在自体が全く異なる実体を持つ楽器となっていた。

琵琶の侘び寂びの響きから徐々に熱を帯びる田中雄氏の演奏は、ヴィオラの地の底から高まる須田祥子氏の演奏とともにオーケストラが加わり、大きな

※風が物にあたって発する音。風の声。 ※四天王中の持国天と増長天。あるいは多聞天と持国天。または増長天と多聞天。日天子と月天子。梵天と帝釈天。

日本「筆」物語②

原毛をめぐる様々な問題点

一本の筆の中にも現在の世界情勢が凝縮されている。
理想の筆作りに必要な理想の原毛を求める筆師たちの苦悩。
入手が困難視される原毛をめぐる現状を紹介。

清農堂主人
阿部信治
(あへしんじ)

用途によって異なる筆の原毛

大学での講義や美術館のワークシヨップで「この筆は何の毛で出来ているんでしょうか」という質問がよく出ます。

一般的に日本画筆は様々な毛の組み合わせから出来ていて、たとえば白い毛だけで作られている「天然則妙」は、同じ白い毛であっても、先は白猫と羊毛、肩から腰は羊尾、巻いてある上毛の腰は白馬の胴毛と、四種類以上の毛から構成されていますし、これが「長流」のような付立筆になると、狸・鹿・馬などが加わり、さらに種類が増えてきます。

また鼬や狸の面相筆などのように一種類の毛だけで作られているものでも、先の毛は日本産、腰の毛は中国産というように品質が異なるものもあります。

良質な日本画筆を作るためには、高い製筆技術が求められるのは勿論ですが、様々な種類の原毛を豊富に集めておく事も大事で、私も長い間それに腐心してきました。



原材料 羊毛(右)と羊尾(左)

獣毛というと、どこにでもいる動物の毛という印象があるでしょ

うが、筆に使える毛はさほど多くなく、白猫やコリスキー（シベリアや中国東北部に生息する鼬の一種）、日本狸など重さでいうと金よりも高価な毛もあります。

ここではその代表的なものをみてみましょう。

一般的に「羊毛」と呼ばれているのは、中国南部の山羊毛というヤギの毛で、中国の特産品で胴毛と羊尾に分かれ、胴毛には生える部位によって様々な種類があります。

以前は国家統制で上海からしか出荷されませんでした。が、改革解放が進んで、南京産、蘇州産など門戸が拡がり、今ではツテさえあれば、牧場のような原毛工場に行つて、自分で選別して買う事も出来るようになりました。しかし反面、中国社会的発展によつて様々な歪みも生じています。

困難さが増す原毛の入手

毛は一般的に、主な用途に使われた後の副産物として出てくるもので、ヤギは食肉となり、毛はだいたい中国の旧正月明けに市場に出ています。以前は肉の量を多くするために、長年飼育してから屠殺していたので、長く硬いしかりとした毛が出て、刷毛や平筆用に重宝しました。しかし、所得の増加と共に軟かい肉質を好む傾向が拡がり、早いうち、つまり若いうちに屠殺してしまうようになったので、毛は細く軟かく、普通の付立筆や線描筆には向くの

ですが、刷毛向きの太く強い毛が少なくなり苦勞しています。

私が最初に中国に行った三十数年前には、ヤギは牧場に放し飼いされて草を食んでいましたが、今は畜舎に集め合成飼料で育てているようで、今後の毛質が心配です。

また、地球温暖化の影響で、酷寒の季節も短くなり、毛質が年々荒くなつていく気がします。

さらに追い打ちをかけているのが、今近の日中関係で、法律の遵守、審査の厳格化という名目で、円滑な貿易が行われない事態が生じているようです。

天津から輸入される中国産の鼬の尾も、日本画筆の主要な原毛の一つですが、ワシントン条約に触れる種があるとの事で機械整毛された毛はともかく、尾そのものでは輸入されない状態が続いています。

良質の日本画筆を作るためには、尾そのものを部位別、質別に抜き分ける作業が不可欠で、今後の情況がどうなるか、予断を許しません。

その他、狸・馬・リス・猫など使う獣毛の種類は



中国での毛の選別

多岐に亘っていますが、どの原毛も先行きは不透明な状態のようです。

小さな仕事場でコツコツ仕事を続けていますが、この小さな部屋にも、世界の動きは確実に押し寄せてきています。

筆者略歴

清農堂主人、一九五二年生まれ。
約四十年間、日本画筆製作に従事。
東京藝術大学・武蔵野美術大学等、非常勤講師。

役員等のご紹介

当平成二十二年四月一日に公益財団法人に移行後四年が経過し、役員等の任期満了に伴う選任を行い若干異動がありましたので、左記のとおりご紹介いたします。

◎名誉顧問（一名）
三笠宮崇仁殿下

◎顧問（二名）
俵谷 利幸 弁護士
玉井 賢二（公財）平山郁夫シルクロード美術館 副理事長

◎評議員（二十二名）

秋山耿太郎 朝日新聞社 相談役

飯田 亮 セコム(株) 取締役最高顧問

池田 政治 東京工科大学 デザイン学部長

今井 環 (株)NHKエンタープライズ 代表取締役社長

内村 宏 (株)三越伊勢丹 三越日本橋本店美術部長

浦井 正明 寛永寺 長藤

奥島 孝康 白鷗大学 学長

加賀 信子 (株)高島屋 美術部長

是枝 伸彦 (株)ミロク情報サービス 代表取締役会長

酒井 裕 (株)精養軒 代表取締役社長

佐藤 一郎 金沢美術工芸大学 教授

島谷 弘幸 東京国立博物館 副館長

白井 勝也 (株)小学館 最高顧問

澄川 喜一（公財）横浜市芸術文化振興財団 理事長

高橋 司（公財）鹿島美術財団 常務理事

野間 省伸 (株)講談社 代表取締役社長
箱島 信一 (二財) 歴史民俗博物館振興会 理事

土生 修一 (公社) 日本記者クラブ 事務局長

真室 佳武 東京都美術館 館長

水野敬三郎 東京藝術大学 名誉教授

吉見 淳一 読売新聞東京本社 事業局次長兼文化事業部長

渡邊 明義 (一財) 世界紙文化遺産支援財団 代表理事

理事

伊東信一郎 ANAホールディングス(株) 代表取締役社長

高嶋 達佳 (株)電通 会長

滝 久雄 (株)NKB 取締役会長 創業者

田邊三郎助 町田市立博物館 館長

西浦 忠輝 国士館大学 教授

野口 昇 (公社) 日本ユネスコ協会連盟 理事長

宮廻 正明 東京藝術大学 教授

◎監事（二名）

西巻 茂 税理士

布施 謙吉 弁護士

平成二十六年六月現在 敬称略／五十音順

文化財保存修復支援 カレンダー募金のお知らせ



上巻8の場面(模写:牧野香里)

二〇一五年のカレンダーは、昨年に引き続き、出光美術館所蔵の国宝「伴大納言絵巻」を、東京藝術大学日本画研究室が現状模写した作品を題材にしました。

平安時代における四大絵巻の一つで、実際に起きた事件をもとに制作された壮大な歴史ドラマが描かれています。

上、中、下巻に分かれています。この物語の現状模写作品が完成するまで、今後数年間にわたり取り上げてゆく予定です。ご期待したいと思います。

オリジナル作品に優るとも劣らない模写制作の卓越した技術をご堪能いただくとともに、文化財保護の重要性をご理解いただきご支援いただければ幸いです。

一口二千五百円以上のご寄付をいただい

た方に、このカレンダーを一部贈呈します。お申し込みは左記までお問い合わせください。

【お問い合わせ】
文化財保護・芸術研究助成財団カレンダー係
電話（〇三）五六八五―二三一一
受付時間 十時～十七時（土、日、祝日及び十二月二十七日～一月三日を除く）

カレンダーをプレゼントします

当財団では、文化財保護の精神と重要性を広く知っていただくため、前記の二〇一五年版文化財保存修復支援カレンダーを、応募いただいた方の中から抽選で二十名様にプレゼントします。

【応募方法等】

ハガキに、「文化財保存修復支援カレンダー希望」とご記入の上、住所、氏名を明記し、左記へお送りください。発表は、当選者への発送をもって代えさせていただきます。

◎応募先

一〇一〇〇〇七

台東区上野公園十二―五十

（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

●締切
平成二十六年十一月末日

お願い

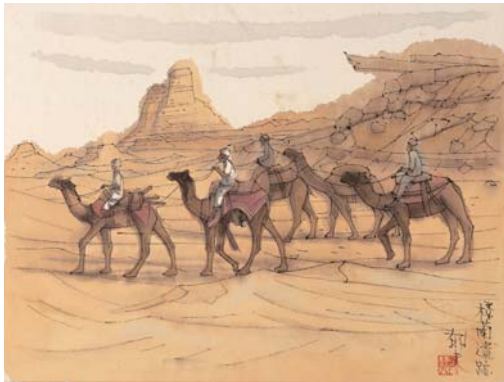
◎東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金のご願い

皆様のご支援、ご協力により東日本大震災により被災した文化財の救援・復旧支援

事業につきましては、前号(二〇一四年夏号No.七十五号)でご報告しましたとおり徐々に復興は進んでおりますが、いまだ支援を待っている文化財があります。引き続き皆様の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。 募金のお振込み手続きは左記の銀行振込又は郵便為替によりお願い申し上げます。 * 銀行振込(①銀行名②口座番号③名義) ① 三井住友銀行 上野支店 ② 普通 6615496 ③ 公財文化財保護・芸術研究助成財団 ※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、領収書、お礼状の発行等の必要上、財団事務局に事前にご連絡をいたけると幸いです。 (電話：〇三―五六八五―二三一一) 郵便振替(①振替番号②加入者名) ① 0016005112319 ② 公財文化財保護・芸術研究助成財団 ※通信欄に「地震」とお書きください。 なお、募金はクレジットカードからも可能です。詳細は当財団のホームページをご覧ください。 * ◎賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い 〈賛助会員〉 当財団では、財団の活動趣旨にご理解、ご賛同いただき、恒常的にご支援いただける法人、個人の賛助会員を募集しています。 法人正会員 年額(1口) 50万円 個人正会員 年額(1口) 1万円 維持会員 年額(1口) 10万円 〈ご寄付〉 賛助会員の他に、ご寄付も随時受け付けております。 また、当財団では、新たに創設された寄	も図書館所蔵資料で見る歩み」 二月二十五日(火)～十一月三十日(日) ☆東京都美術館 (〇三・三八三三・四一九一) ①特別展「ウフィツィ美術館展―黄金のルネサンス ボッティチェリからブロンズイノノまで―」 十月十一日(土)～十二月十四日(日) ☆上野の森美術館 (〇三・三八三三・四一九一) ①ポストン美術館浮世絵名品展 北斎 九月十三日(土)～十一月九日(日) ②進撃の巨人展 十一月二十八日(金)～平成二十七年一月二十五日(日) ☆台東区立朝倉彫塑館 (〇三・三八二一・四五四九) ①特別展「没後五十年 朝倉文夫展 ふたつの故郷―朝地と谷中―」 九月十三日(土)～十二月十四日(日) ☆台東区立書道博物館 (〇三・三八七二・二六四五) ①企画展「中村不折―僕の歩いた道―」(仮称) 十月十一日(土)～平成二十七年三月二十二日(日) ☆上野松坂屋 (〇三・三八三三・一一一一) ①日本画・洋画・彫刻・陶芸特選展 十一月十二日(水)～十一月十八日(火) ☆都立旧岩崎庭園 (〇三・三八二三・八三四〇) ①庭園ガイドボランティアスペシャル講演会(岩崎四代)日本の近代化を背負った男たち― 十一月十五日(土)十五時～十六時三十分(当日先着八十名) ②庭園ガイド(毎日十一時～十四時)各
---	---

付制度によるご寄付やカードのご利用によるご寄付も受け付けております。概要は次のとおりです。 (特定寄付信託) ○特定寄付信託は、信託を通じた寄附を促進し、より一層の公益活動を促す観点から平成二十三年度税制改正において創設された寄付の制度です。 ○当財団はみずほ信託銀行と寄付に関する包括的契約書を締結しています。信託に関する詳細につきましては、みずほ信託銀行にお問合せください。 (カード) ○当財団は、「社会貢献」をテーマとした寄付金機能付きクレジットカード「JACCS CARD link」を発行している株式会社ジャックスとの連携により、同カードをショッピング利用した場合に、利用額の一定割合を同社のご負担によりご寄付いただくこととしています。 ○同社のカード会員となり、カードをご利用いただくことにより、当財団の活動をご支援いただくこととなりますので、カードのご利用を予定されている方は是非ご検討願います。 ○お申し込みは、当財団ホームページから、または事務局までお問合せください。 http://www.bunkazai.or.jp/index2.html ☆財団案内及び賛助会員入会申込書のご請求、その他ご質問等お問い合わせは財団	回四十五分程度(予約不要) 無料(但し入園料は必要) (演奏会) ☆東京藝術大学奏楽堂 (〇五〇・五五二五・二三〇〇) ①藝大プロジェクト2014 シェイクスピア人とその時代Ⅲ「時空を超えたシェイクスピア」(二千元) 十一月一日(土)十五時～ ②うたシリーズ(二千元) 十一月七日(金)十九時～ ③モーニングコンサートⅡ(千元) 十一月十三日(木)十一時～ ④学生オーケストラ定期演奏会第五十一回(藝大定期第三六六回)(千五百円) 十一月十五日(土)十五時～ ⑤藝大フィルハーモニア合唱定期(藝大定期第三六七回)(三千元) 十一月二十二日(土)十五時～ ⑥藝大定期吹奏楽第80回(千五百円) 十一月二十三日(日)十四時～ ⑦モーニングコンサート12(千元) 十一月二十七日(木)十一時～ ⑧藝大プロジェクト2014 シェイクスピア人とその時代Ⅳ「東西が響き合うシェイクスピア」(二千元) 十一月三十日(日)十五時～ ☆上野学園 石橋メモリアルホール (〇三・三八四三・三〇四三) ①上野学園創立一一〇周年記念 第二回合唱の祭典(無料) 十一月十五日(土)十五時～ ②(仮)エンリコ・オノフリ&チバング・コンサート(未定) 十一月十六日(日)十七時～ ③上野学園大学第63回オーケストラ定期演奏会(千五百円) 十一月二十二日(土)十五時三十分～
--	---

事務局までご連絡をお願いいたします。	事務局長までご連絡をお願いいたします。
平山郁夫画伯が最も愛着をもって接したシルクロードの地は、敦煌と楼蘭が双壁であらう。この地を題材とした作品の数それが雄弁に語っている。 画伯が楼蘭行きにかけた執念は大変なものだった。強烈な砂嵐の危険もかえりみず訪れた最初の訪問。極寒の中、楼蘭の夜空を飾る星々の煌めきに感動した二回目の旅。 近い将来、この楼蘭故城も世界遺産として登録される日を期待したい。その時、私も画伯の旅の追体験をしたいものだ。 さまよえる湖として知られるロプ・ノール湖の消長と運命を共にした楼蘭王国。シルクロードのオアシス国家であったこの小国をめぐる物語は井上靖の名作「楼蘭」でつとに名高い。画伯もこの小説からイメージを喚起されて「鄯善国妃子(せんぜんこくひし)楼蘭の王女」という作品を描いている。 ここに紹介した素描は画伯晩年の作品にあたる。仏塔跡を横に楼蘭の地を行く旅人の胸中を知る人は画伯のみであらう。	平山郁夫画伯が最も愛着をもって接したシルクロードの地は、敦煌と楼蘭が双壁であらう。この地を題材とした作品の数それが雄弁に語っている。 画伯が楼蘭行きにかけた執念は大変なものだった。強烈な砂嵐の危険もかえりみず訪れた最初の訪問。極寒の中、楼蘭の夜空を飾る星々の煌めきに感動した二回目の旅。 近い将来、この楼蘭故城も世界遺産として登録される日を期待したい。その時、私も画伯の旅の追体験をしたいものだ。 さまよえる湖として知られるロプ・ノール湖の消長と運命を共にした楼蘭王国。シルクロードのオアシス国家であったこの小国をめぐる物語は井上靖の名作「楼蘭」でつとに名高い。画伯もこの小説からイメージを喚起されて「鄯善国妃子(せんぜんこくひし)楼蘭の王女」という作品を描いている。 ここに紹介した素描は画伯晩年の作品にあたる。仏塔跡を横に楼蘭の地を行く旅人の胸中を知る人は画伯のみであらう。



楼蘭遺跡 2007年

★平成二十六年十月十五日発行 ★編集発行／公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎ 〒1100007 東京都台東区上野公園十二一五十五 電話(〇三)五六八五―二三一一 FAX(〇三)五六八五―五二二五 URL:http://www.bunkazai.or.jp/ E-mail:jimukyoku@bunkazai.or.jp ★印刷 株式会社 東都工芸印刷	ゾーンフェスティバル」として展覧会や演奏会等様々な催し物を開催中(予定です。その一部をご紹介しますので、ご利用のご参考にしてください。なお、詳細はそれぞれの主催者等にご確認ください。 (展覧会等) ☆東京国立博物館 (〇三・五七七七・八六〇〇ハローダイヤル) ①特別展「東アジアの華 陶磁名品展」 九月二十日(土)～十一月二十四日(月) ②「日本国宝展」 十月十五日(水)～十二月七日(日) ③特別展「みちのくの仏像」 平成二十七年一月十四日(水)～四月五日(日) ④秋の庭園解放 十月二十五日(土)～十二月七日(日) ☆国立科学博物館 (〇三・五七七七・八六〇〇ハローダイヤル) ①企画展「ヨシモトコレクションの世界」 十月十五日(水)～平成二十七年一月十八日(日) ②特別展「ヒカリ展 光のふしぎ、未知の輝きに迫る！」 十月二十八日(火)～平成二十七年二月二十二日(日) ☆国立西洋美術館 (〇三・五七七七・八六〇〇ハローダイヤル) ①企画展「日本・スイス国交樹立一五〇周年記念フェルディナント・ホドラー展」 十月七日(火)～平成二十七年一月十二日(月) ☆東京藝術大学大学美術館 (〇五〇・五五二五・二二〇〇) ①河北秀也東京藝術大学退任記念 地下鉄10年を走りぬけて iichikoデザイン30年展 十一月十三日(木)～十一月二十六日(水) ☆国立国会図書館 国際子ども図書館 (〇三・三八二七・二〇五三) ①展示会「日本の子どもの文学―国際子ども
年初、心配されていた冷夏予想は杞憂に終わりました。しかし、その反動でしょうか、大変な猛暑の夏でした。本書が皆さまのお手元に届く頃は、一転して空高く、秋風が肌に心地よい季節だと思っています。 カタールの首都ドーハで開催されたユネスコの第三十八回世界遺産委員会で群馬県にある「富岡製糸場」が世界遺産として登録されました。また、中国、カザフスタン、キルギスに残るシルクロードの遺跡も世界遺産として登録されました。詳細は本文の通りですが、天上の平山郁夫先生もさぞ喜びのことと思います。 京都の夏の風物詩である祇園祭では、一五〇年ぶりに復活した大船鉦が話題をよびましたが、この祭りを支える(公財)祇園祭山鉦連合会の皆さま方には、東日本大震災被災文化財復旧・支援事業では物心両面で多大なる御協力を賜りました。ここに伝統行事の復活に対する祝意と私どもへのお力添えに対する感謝の意を表させていただきます。 秋も深まってまいります。皆さま、風邪など召しませないように……。ご自愛ください。	今号の表紙 平山郁夫 楼蘭遺跡
編集後記	平山郁夫画伯が最も愛着をもって接したシルクロードの地は、敦煌と楼蘭が双壁であらう。この地を題材とした作品の数それが雄弁に語っている。 画伯が楼蘭行きにかけた執念は大変なものだった。強烈な砂嵐の危険もかえりみず訪れた最初の訪問。極寒の中、楼蘭の夜空を飾る星々の煌めきに感動した二回目の旅。 近い将来、この楼蘭故城も世界遺産として登録される日を期待したい。その時、私も画伯の旅の追体験をしたいものだ。 さまよえる湖として知られるロプ・ノール湖の消長と運命を共にした楼蘭王国。シルクロードのオアシス国家であったこの小国をめぐる物語は井上靖の名作「楼蘭」でつとに名高い。画伯もこの小説からイメージを喚起されて「鄯善国妃子(せんぜんこくひし)楼蘭の王女」という作品を描いている。 ここに紹介した素描は画伯晩年の作品にあたる。仏塔跡を横に楼蘭の地を行く旅人の胸中を知る人は画伯のみであらう。